國學院大學学術情報リポジトリ

A Sudy of a Shintoist View of Cosmos through the Analysis of OKA Kumaomi's Sandaiko-no-tuiko, 1807

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小林, 威朗
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001685

岡熊臣『三大考之追考』の「天地泉」

―霊魂観研究の序として―

小林威朗

はじめに

津和野の神職国学者である岡熊臣は、文化四年（一八〇七）に『三大考之追考』を著している。本稿の目的は、この著作を分析することにより、その位置付けを考察することである。まず生年からの略歴を示し、その上で熊臣に関する研究史を霊魂観に着目しながら概観したい。

岡熊臣（天明三年～嘉永四年、一七八三～一八五一）は、石見国鹿足郡木部村の冨長山（とみたけやま）八幡宮の神職家に生まれる。父忠英の影響により幼い頃から学問を好み、十四歳で津和野藩士佐伯種孚について歌を学び、十五歳のときに本居宣長の『玉鉾百首』を見てその学問に傾倒する。享和元年（一八〇一）に宣長とその門人小篠敏（浜田藩儒学者、父忠英の友人）が同じ時期に没したということもあったが、翌年には最初の著作である『皇国史略』を著わすまでにその

学問は蓄積されていた。そして、文化四年に当時山陰で宣長の学問を広めていた出雲の千家俊信（清主）に入門し、そのころ『三大考之追考』を著わす。同五年には、江戸へ遊学し今井秀清（後の大国隆正）と出会い、翌年彼の紹介で宣長門人村田春門に入門する（同年中に帰国）。同七年には、漢詩をつくることをやめ熊臣（それまでは忠栄）と改名している。[1]

これまで熊臣に関する研究は、主に神道学や思想史の分野から行われている。例えば、前者においては神葬祭復興運動[2]や霊魂観・死生観研究[3]が、後者においては「淫祀」論[4]等の研究が挙げられる。その結果から、研鑽を積みながら多くの著作を残し藩学に登用された国学者であり、また神葬祭復興運動を成し遂げた神職であるとされている。つまり、「理論と実践」を併せ持つ神職国学者と評価されているのである。[5]しかし、理論面の研究についていえば、多くの論者が霊魂観や幽冥論に触れているにもかかわらず纏まった論考は少なく、十分な蓄積があるとは言い難い。

例えば、村岡典嗣は「復古神道に於ける幽冥観の変遷」[6]において「彼等（平田の門下門流）に於いて、思想上著しく認められる発展の跡は、応報てふ考の自然の結論として、死後幽界に於ける霊魂の部所について、それ〴〵説が生じた事である」と述べ、熊臣の説を六人部是香の説（幽界に神位界と凶徒界が存在する）や矢野玄道の説（神界、仙界、妖界がある）と並べて次のように紹介している。

善悪に関せず、本つ魂は根国を経て黄泉にゆき他の魂は此世に長く止つて、幽冥界に入るとして、篤胤説と宣長説とに折衷を試みた（熊臣の千代のすみか）

河野省三は『国学の研究』[7]において、熊臣の『千世の住処』を複数の国学者の説（死後霊魂は黄泉に往くとする説、墓所に留まるとする説、天宮に登り神になるとする説）を「折衷的統一的見解を立てたもの」として紹介している。その中で熊臣は、人は死後「神となりて、此世に、とこしへに、留る物ぞと思ひ」という信念を持っていたこと、宣

長も最晩年には山室山に霊の鎮まり場所を定めたという事実に影響を受けて「生死落着安心などの沙汰」を研究したことを述べている。

佐野正巳は『国学と蘭学』[8]のなかで本居宣長の学問を発展させた人物として熊臣を位置付けている。そして熊臣の『三大考之追考』『霊の梁』および『千世の住処』を次のように紹介している。

「三大考之追考」は、…（中略）…その全文を宣長が「古事記伝」巻一七の末に付載した門人服部中庸の「三大考」の熊臣評論である。「三大考之追考」は、中庸や、それを発展させた「霊能真柱」の著者、平田篤胤の説とはやや相容れない説が紹介され、文化一三年（一八一六）野々口隆正の紹介により篤胤に会ったのを機に〝三大考追々考〟ともいうべき「霊の梁」を著わすのである。（九〇～九一頁）

また、「文政五年、宣長の墓に詣で、春庭に会い没後の門人とな」ったことが契機となり『千世の住処』を草したとしている。そして、

熊臣は、神職として熱意をもってこれ（霊魂の行方の研究―筆者注）に当たり、神葬祭復興運動の心的な面を推進していくのだった。神葬祭運動には、古典研究、霊魂研究を論拠とした神道思想が根底にあったのである。（九六頁）

と述べて、これらの著作が、熊臣の生涯において最も重要な出来事の一つである神葬祭復興運動の原動力になっているとしている。

安蘇谷正彦は「岡熊臣の『死』の問題」[9]のなかで、神葬祭復興運動を行った熊臣の死生観、霊魂観、死の対処法の三点に着目し、宣長と篤胤の思想と比較しながら論じている。そのなかで、熊臣は「死を悪事や禍いの中でも究極のものと捉え、憂ひ悲しむべきこと」としていることから「宣長、篤胤説と一致する」としている。また、熊臣は

「本霊」と「奇魂・幸魂」等に分かれるとする考えから、死後黄泉に往くとする説も、幽冥界に往くとする説も、「一面的」な論だと否定しているが、その考えは「本霊が夜見国へ行くという考えは宣長から、幸魂、奇魂が幽冥界に行くという考えは篤胤から採用し」「人間の霊魂を二つ以上に捉え、死後の霊魂の行方も二ヶ所に分けることによって、宣長、篤胤説をうまく調和させ、熊臣独自の説を形成した」としている。熊臣の死後観については篤胤が有していた「霊魂に対する審判」の思想がなく、「冥罰の考えさえ見当たらない」ことから「この世における人間の努力によって、死後安心が得られるという篤胤のような思想体系」ではなく「宣長のように神々に委ねる安心論に近い」としている。

以上のように先行研究を概観すると、熊臣の霊魂観はその到達点とされる『千代の住処』は分析されているが形成過程は全く研究されていないことがわかる。

『三大考之追考』は、熊臣の霊魂観を決定づける三つの著作（『霊の梁』（文化十三年）、『千世の住処』（文政五年））のうちの一つである。これらの著作は、熊臣の霊魂観や幽冥論、さらには安心論を研究する上で着目されているが、[10] それぞれの著作の研究は十分なされているとは言い難い。さらに『三大考之追考』は、その書名が表しているように服部中庸が著し、本居宣長の『古事記伝』巻一七に収められた『三大考』に関係する著作であるにもかかわらず、その内容を分析した研究は皆無に等しいという現状もある。

そこで本稿では、熊臣の霊魂観形成の「前論」[11] ともされている『三大考之追考』の分析から、熊臣が考えていた「天地泉」を明らかにし、熊臣の霊魂観研究の基礎作業とすることを目的とする。[12] まずいわゆる「三大考論争」に関する先行研究を概観することにより、『三大考』の問題点を抽出する。その問題点を踏まえつつ『三大考之追考』を分析することにより、熊臣が『三大考』をどのように受け止め、何を批判したかを明らかにする。さらにその分析から、熊臣が霊魂観や幽冥論を研究していくこととなる契機としての『三大考之追考』の位置付けを確認することで熊

臣の霊魂観研究の一助としたい。

一　『三大考』の問題点

はじめに、中庸の著書『三大考』とそれに端を発するいわゆる「三大考論争」に関する研究を概観することにより、『三大考』の問題点を抽出し、熊臣の『三大考之追考』を考察するうえでの補助作業としたい。

西川順土は「三大考を中心とする宇宙觀の問題」[13]において、版本『三大考』、本居宣長が書入れした「三大考草稿」[14]、『古事記伝』の三つを比較している。その結果、西川は「三大考は宣長の訂正を經たことが明らかになると同時に、宣長の所説が古事記傳に述べた所と異つて來たこともあきらかになつた」と述べている。そして『三大考』以後に問題となる事柄の内①「天地開闢について」、②「月讀命と須佐之男命について」、③「黄泉國について」の三つを、平田篤胤等の学派と本居大平等の学派の著作を引用しながら解説を加えている。まず、①については次の三つの論点に分けられる。

（イ）神が天地を創造したのでなく、天地先づ成りて神が生じた事

（ロ）葦芽の如きものは天地となるものではなく神となる物である事

（ハ）三大考等の所説が外國の天文説によつて構成されたのであつて、古學者の執るべき態度と云へないこと

②については、『古事記伝』中で宣長が仮説に留めていた「月讀命と須佐之男命が同一神である」とする説を、中庸が『三大考』において断定したことが問題となる。③では、『三大考』において初めて「霊魂の歸所としての黄泉國」を月としたことが論争となる（西川は「宣長の指教」によることを論文中で明らかにしている）。

また、西川が『三大考』とそれらをめぐる論争を一貫して「神學に關する論爭」と位置付けていることは神道学の立場からの研究として傾聴に値するであろう。

小澤正夫は「三大考をめぐる論争」[15]において、版本『三大考』と宣長著「天地図」に「類似點」を見出している。また『九山八海解嘲論』や『天文図説』『真暦考』といった宣長の著作や門人の小篠御野との関係から、宣長はこの当時「洋學卽ち蘭學」に注目していたことを示し、「彼はこれ（西洋の天文学―筆者註）を以て早速儒佛の宇宙論を論破すると共に、我が古傳の天地開闢説に新しい基礎を與へようとしたのである。かういふ意圖の下に著されたものが、…（中略）…中庸の三大考である」としている。また、宣長の没後には、大平一派と篤胤の間に論争が起こったことを述べ、その根本には古伝の解釈方法や蘭学に対する考え方の違いがあることを指摘している。そして、「三大考の論争は、畢竟本居學と平田學との對立である。この両派の學説を簡單にいへば、前者の非合理主義、信仰主義に對して、後者は合理主義、科学主義であるが、また後者の雜學的傾向から、前者がその國學としての純粹性をまもろうとしたのがこの論争である」としている。

小澤はこの論文の最後に「何故こんな本を記傳の付録にしたか」という問いを立て、その答えを「宣長が儒佛の宇宙論に對抗すべき自らの宇宙論を求めていた」と考え、その後中庸、篤胤と発展していく思想（＝「國學の思想的展開の主流」）が「新しい雄大な國家主義的宇宙論を完成した」という見通しを立てている。

西川は前掲論文から約三十年後に再度『三大考』に関する論文「三大考の成立について」[16]を著している。この中で、宣長の「天地図」と『三大考』の比較を試み、その構想が「全く異った」ものであることを示すと共に、「初稿本」の文言と「天経或問」「紅毛雜話」等の洋学書を比較することにより、「中庸の三大考に関連して背後に西洋の天文学の知識が作用している」ことを実証的に示している。後者の点に関して、「日地月を通して水と火が重要な部分を

占めておるのは天経或問が風水火地の四大の内でも特に水火を重くみる方法に近く、三大考もこの考え方から抜け切っていない」と指摘している部分は、後に篤胤が『霊能真柱』で批判していることを考えると重要であろう。また、それまで未発掘であった中庸著「三大考追考」「七大考」の分析を行い、「天文学の解説部分が詳細になり、三大から七大へと発展し」たことなどから、「中庸は科学的事実を追う態度を持ちつゞけていたと思われる」としている。

中西正幸は「三大考以後」[17]の中で、大平、篤胤をはじめ小林茂岳、鈴木朖、夏目甕麿、佐藤信淵、六人部是香等が『三大考』以後に著わした各論の相違点を明らかにしている。本稿の立場から、この論考で注目したいのは岡熊臣の『三大考之追考』に言及している点である。[18]すなわち、

中庸は宣長の加筆を容れたにせよ、当初は黄泉国を地下にあらしめ、ここを霊魂の帰趨する処と思惟していた。岡熊臣も「大地の表上は顕国にて、裏下ハ根底の国」とも「天地泉ハ三ニシテ四也、大地ニ上下アレハ也」とも云い、…（中略）…死後の霊界を地胎中に定めている。これらの見解は大平・朖・茂岳・甕麿などに共通し、当時一般のものであったろうことは疑いないところである。（八九頁）

として、死後の世界が地中にあるとする国学者として熊臣を位置付けている。

以上、先行研究を概観することにより得られる『三大考』の問題点は大きく二つに分けられる。一つは『三大考』の文言に端を発する問題で、さらに①天地開闢について、②月讀命と須佐之男命について、③根国と黄泉国についての三つに分けられる。もう一つは、服部中庸の西洋天文学に対する認識や、本居宣長と『三大考』との関係といった『三大考』の背景の問題である。

そこで、次節ではこれらの問題点に注意を払いつつ、岡熊臣が著した『三大考之追考』を見ていくこととする。

二　『三大考之追考』の概観

『三大考之追考』（以下『追考』と略す）は文化四年五月に成ったもので、その著述のきっかけは中庸の『三大考』を読んだことであった。（以下、本稿における『追考』の引用は加藤隆久編『岡熊臣集　上』[19]を用いる。また、本稿中の図も同書からの転載である。）

まず、熊臣の『三大考』に対する基本姿勢を把握するため、『追考』の冒頭部分を引用する。

服部中庸翁ノ三大考ト云ヘル天地泉ノ三ヲ考ヘ得ラレタル、誠ニ古事記ノ妙ナル伝ニヨリテ、カク万國ニ比類ナキ考ノ出来テ、目ニ見エヌ天地泉ノアリサマノ明ニ知リ得ラルルコトノ有リ難キニ、己其ノ大ナル奇シク異シキ考ニツキテ、イトモ愚ナル意モテ、思ヒ得タルコトヲシモ筆ノ端ニ書キ出ヅルハ、イカニモヲコノ所為ナレドモ、思ヒ得タルコトヲシ空黙スベキニモアラデナム、左ニ記シ挙ゲツル。凡ベテハ、本書ニ譲リテ略キヌ。只其ノ不足ヲ補ヒ加フル志ノミナリ。見タマハム人等其ノ罪アラムヲバ、宥免シ給ヒテヨ。（二九五頁）

中庸の『三大考』は古事記に依拠して著された非常に優れた考えであり、目に見えない「天地泉」の様子がわかるというのは尊いことである。この霊妙な考えに対する意見をはしばしに書くのは愚かなことだけれども、考えたことを黙ってもおけないというのが熊臣の性分であったようである。そして、その大凡の方向性は『三大考』に依拠しつつも、熊臣の考える「不足」を補ったのがこの『追考』なのである。

では熊臣は何に共感し、何に不足を感じ補ったのか。

○三大考之第一図ヨリ次々天地泉ノ所成形容ハ、皆彼ノ書ニ譲リテ略ケリ。コハ重ネテ云フ可キコトナケレバナリ。今ココニ己ガ考ヘ補フモノハ、タダ月讀命・素戔嗚尊ハ本ヨリ二神、マタ根之堅洲國ト泉トハモト一連ナリ

シガ、後ニ離レタルト云フ事ノミナリ。（二九五頁）

『三大考』で用いられた十葉の図の内、「天地泉ノ所成形容」に対する異論は無かったが、月讀命と素戔嗚尊の関係、根国と黄泉の関係の二点について問題視している。つまり、前節で抽出した「『三大考』の文言を契機とする問題」のうち、①については異論なく、②③について問題視しているといえよう。この二点について「不足」を補うため熊臣は議論を展開していく。

其ノ故ハ、マヅ高天原ト此ノ國土ト、此ノ國土ノ成レルサマノ考ノ図ニ見エタル如クナレバ、是ニ對ヘテ、根底國ヲ思ヒ量ルニ、此ノ大地ノ上ノ方ニ連続キタルハ、高天原ニテ〔則考ニイヘル天日ヲサス。〕其ノ高天原ト連レル処ノ臍ノ処、則チ皇國ニテ、又此ノ大地ノ下ノ方ニ連続キタルハ泉國〔則考ニイヘル天ツ月ヲ指ス。〕其ノ泉國ト連レル臍ノ処、則チ根之堅洲國ナリ。イマダ天地泉ノ一連ナリシ時ハ、根底國ヲモ泉國トモ、泉國ヲモ根之堅洲國トモ云ヒシナリ。サレド、分レ離レテ後ハ、月ヲ夜見國ト云フ。〔夜見トハ考ニモイヘル如ク、夜見ル國トイフ事ニテ、則チ今現ノ月ナリ。〕其ノ離レタル跡ニ遺レル処ノ大地ニツキタル國ヲ根底国〔マタ堅洲國トモ云フ。〕ト云ヘドモ、是スナハチ上ノ方ニアル高天原ト此ノ國土、ナレルサマニテ對ヘ知ルベシ。大地ノ表上ニ皇國アルカラハ、下裏ニ根底國有ルコト、疑無キモノナリ。（二九五頁、〔　〕内は割注）

ここでは③の問題点に直接関係する部分から述べられている。重要なのは、「高天原」と「國土」の関係を「泉國」と「根之堅洲国」の関係に推し量るべきだとしている点である。つまり、天と地の切れ離れた部分が「皇國」であるならば、泉と地が切れ離れた部分が根国であると考えていたのである（「天地泉一連之時図」参照）。そして天地泉が連続していた頃は、根国と泉国も連続していたので呼称に混同があったのだとしている。これに続けて「大地ノ表上」の皇国と「下裏」の根国を説明している。すなわち、この地の「上表」にある国々は天照大御神の照らし「知食

國」であって、例えるならば「晝ノ國」であり、「下裏」にある国々は月讀命の照らす国で、例えるなら「夜ノ國」である。また、根国については「大地ノ下ナル根底國ハ素戔嗚尊ノ知食國ニテ、其ノ御子ナル大國主命モマタ根底國ニ鎮マリ給フコト、此ノ大地ノ上ナル皇國ト高天原ノナレルサマニ同ジ心バヘナリ」としている。[20] そして、②の問題点も右で述べた根国と泉国が連続していた状況のために起こったことと考えていた（「此ノ故ニ月讀ト素神ト一神ノ

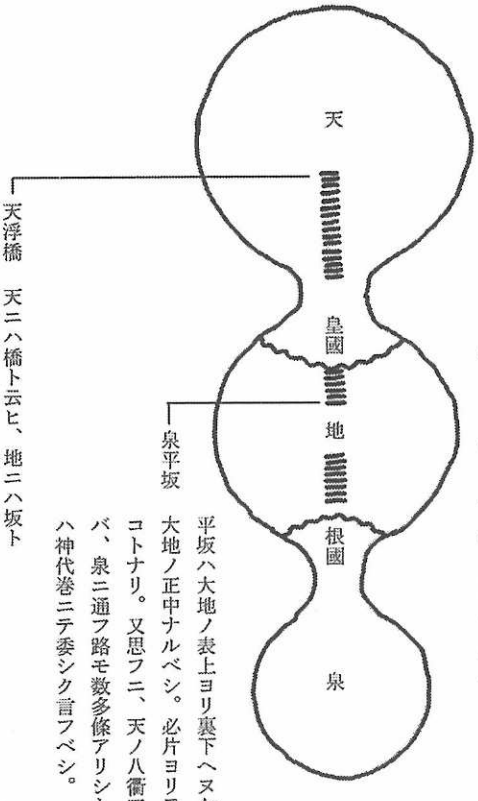

図１「天地泉一連之時図」（加藤隆久編『岡熊臣集　上』国書刊行会、298頁より転載）

如ク思ハル、モ、モトヨリ一ッ連ナル國ナリシ故ナリ…（中略）…後世ニナリテハ、此ノ皇國ト天上トノ事モ一ッニ思ヒ誤ルヤウノ事ナド、對ヘテ知ルベシ」）。

天地泉が連続している状態から、それぞれ分離した状態に移行すると、それぞれの神々も分かれて座すこととなる。

今ノ如ク離レテ後ハ、泉ハ月中ナル國、根底ハ、此ノ大地、下裏ニツキタル國トナレリ。カク分レ離レテハ、國

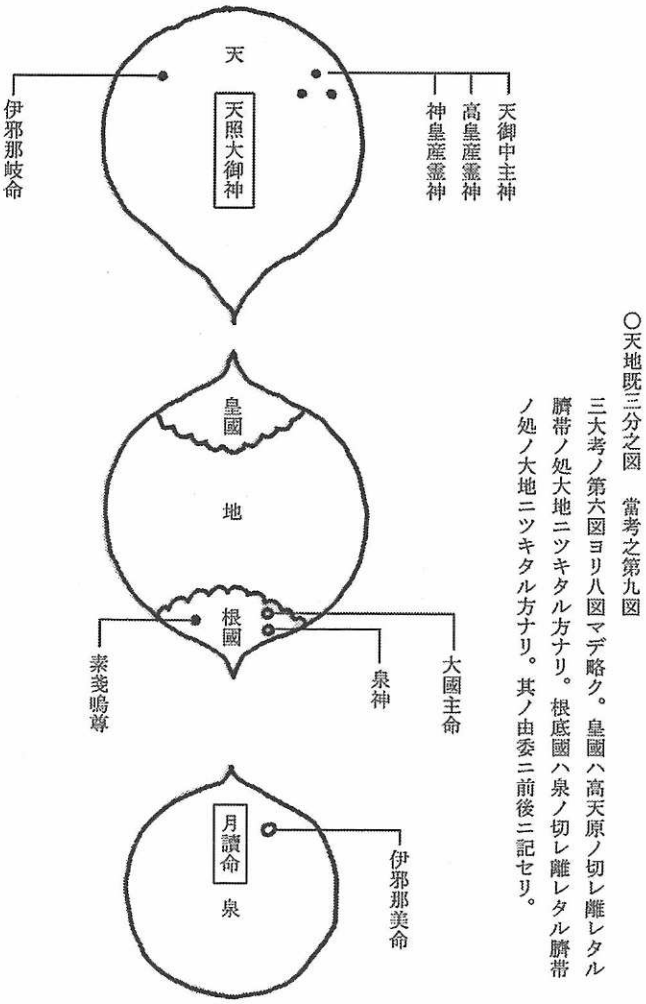

図２「天地既三分之図」（加藤隆久編『岡熊臣集　上』国書刊行会、299頁より転載）

ノミナラズ其ノ大御神等モ、各其ノ國々ニツキテ分レ坐スナリ。マヅ其ノ大御神ヲ申サンニハ、月夜見國ニハ月讀命ノ主宰ニテ伊邪那美命モ留リ住ミ給フ。〔是高天原日少宮ニ伊邪那岐命ノ留リ住ミ給フト對ヘテハカリ知ルベシ。〕又大地ニツキタル根之堅洲國ニハ素戔嗚尊主宰ニテ、豊斟渟神、或ハモトヨリノ泉神ナドモ住ミ給フベシ。（二九六頁）

これに続けて、天地（表と裏）泉が分離した後の日月の運行を説明している。

大地ノ下ノ方ナル素神ノ坐ス根ノ堅洲國ノアタリハ、月讀命ノ照ラシ臨ミ給フ國ナレバ、月ノ光ハ専ラ彼ノ下ノ方ヲ照ラシ給ヘル餘光ゾ、此ノ上ノ方ナル現國々ニハ及ブナラム。又、日ノ大御神ハ此ノ現國々ヲ照ラシ臨マセ給フモノナレバ、彼ノ根國アタリハ此ノ餘光ゾ及ブモノナラム。サレバ、夜ノ國ニモ晝夜アリ。サレドモ、其ノ日ハ四時同ジクテ、月ハ漸ク毎月十五夜ノ程バカリ満月ナルモ、モト全ク此ノ國ノ為ニ照ラシ給ハザル故ニテ、是夜ノ國ノ餘地（ママ）ナレバナリ。日光ヲモ彼ノ國ニ對ヘテ知ルベシ。日光モト専ラ此ノ現國々ノ為ニ照ラシ給ヘバ、彼ノ國ニテハ此ノ國ノ月ヲ見ル如クニゾアルラム。（二九六～二九七頁）

素盞嗚尊がいる根国は月読命が照らされている国で、月の光（皇国から見える）は根国を照らしている残りの光である。また、天照御大神は皇国をはじめ諸国を照らされているので、根国ではその残りの光が及んでいるだろう。そうであるならば、「夜ノ國」にも昼夜はあると考えられる。また、太陽は一年を通じて同じで、月は毎月十五日に満月になるのも、本来は根国を照らすためのものだからである。日の光りをも根国と相対して考えるべきであり、であるならば日の光は根国においてこの国の月を見るようであろう。

また、皇国から見て「イト遠キ外國ニハ夜國」といって「日光纔ニ見ユル國」もあるという。このような国は日が照らす国と月が照らす国との境にあり、「シカモ夜ノ方ニヨレルモノ」であろうと述べている。(21)

以上のような熊臣の天地泉の認識を端的に示せば、まさに「天地泉ハ三ニシテ四ナリ。大地ニ上下アレバナリ。」なのである。これは、『追考』中随所に見られる「對ヘ知ルベシ」という、天と地（表）の関係から相対して考えだされた熊臣の持論であるといえる。

上述のように、本節では『追考』を概観することにより、熊臣が提示した二つの問題点と、その基底をなす、「天

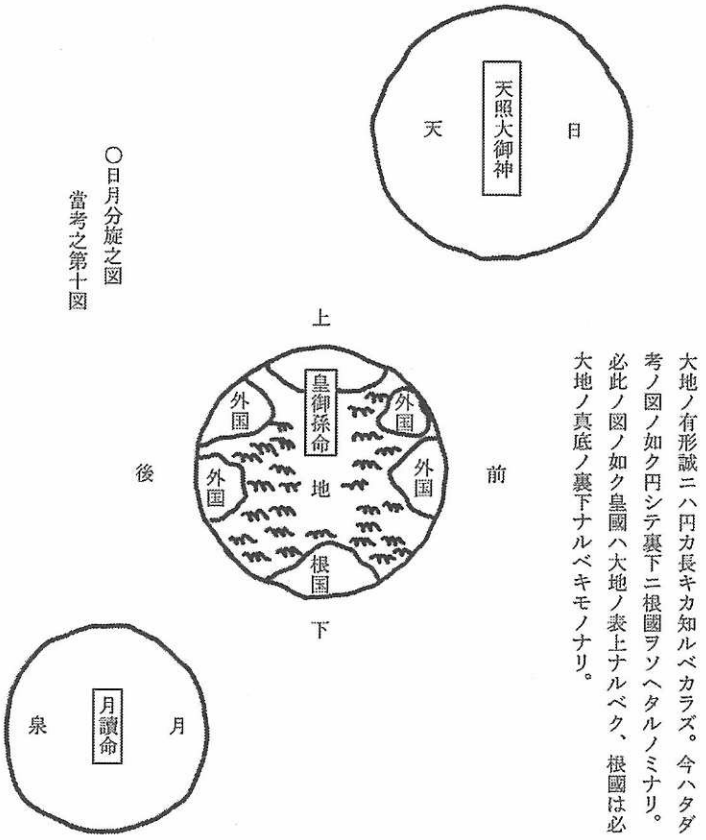

図３「日月分旋之図」（加藤隆久編『岡熊臣集　上』国書刊行会、300頁より転載）

地泉」が「地」に表裏があるため四つであるとする認識を確認した。しかし、このような認識は前節で示した中西論文における熊臣の位置付けと食い違うことになる。すなわち、熊臣は、根国は地の「裏下」にあるのであって地中にあると考えていたわけではないのである。

ここで問題となるのが、熊臣は中庸の『三大考』に依拠しながら論を展開するのであるが、何故このような認識の違いが発生したのかということである。そこで、次節では、熊臣と中庸の「天地泉」に対する認識の違いが生じた原因を考察したい。

三　『三大考之追考』と『三大考』の「外国の説」

前節において『追考』の概要を把握することにより、熊臣の考える『三大考』の問題点を明らかにした。ここでは、その根拠となっている「天地泉」の認識の違いが生じた理由を『三大考』と比較することにより考察したい。

『追考』における議論の基本的な方向性は『三大考』に依拠していることは既に述べた。しかし、『三大考』と『追考』を比較した場合に最も顕著な差異は「外國の説」に対する態度であると考えられる。まず『三大考』の序文から中庸の考えを窺いたい。

天地國土のありかた、其成れる初のさまなど、外國の説どもは、いはゆる佛にもあれ、聖人にもあれ、皆己が心を以て、智の及ぶたけ考へ度りて、必如此あるべき理ぞと、おしあてに定めて、造りいへるもの也、其中に天竺國の説などは、たゞ世の女童を欺くが如き、妄説なれば、論ふにも足らず、又漢國の説などは、何もやゝ物の理を深く考へて、造れる物なれば、打聞くには、げにもと信らるゝが如くなれども、よく思へば、其大極無極陰陽

八卦五行など云理は、もと無きことなるを、此方より其名どもを作り設けて、何事にも是を當て、天地萬物皆、これらの理によりて成れる如く、これらの理をはなるゝことなきが如く云なしたる物にて、是も亦皆妄説也

（『本居宣長全集』第一〇巻二九七頁）[22]

ここでは「天地國土」のある様や成った様子について、「外國の説」である仏教や儒教は人間の考えられる範疇での「おしあて」であり作り話であると述べている。さらに、「天竺國」や「漢國」の説は全て「妄説」であるとして退けている。これに対して皇国については、

こゝに吾皇大御國は、殊に伊邪那岐伊邪那美二柱大神の、生成賜へる御國、天照大御神の生坐る御國、皇御孫尊の、天地と共に、遠長に所知看御國にして、萬國に秀で勝れて、四海の宗國たるが故に、人の心も直く正しくして、外國の如く、さくじり僞ることなかりし故にや、天地の初の事なども、正しき實の説有て、いさゝかも私のさかしらを加ふることなく、ありのまにく、神代より傳はり來にける、これぞ虚僞なき、眞の説には有ける（二九七頁）

と述べている。つまり、皇国は伊邪那岐と伊邪那美が生み成し天照大神が生まれ歴代の天皇が治める他の国々より秀でた国であるために、人も正直で、天地の成る様も正しく伝わっていると考えていたのである。では、どうして「外國の説」は「妄説」で「皇國の伝」は「眞の説」といえるのであろうか。

後世に至り、もろ〳〵の考へ、精くなるに隨ひて、かの虚妄説どもは、やう〳〵にその非の顯れゆくを、此眞の傳は、違ふことなし、然云ゆゑは、近き代になりて、遥に西なる國々の人どもは、海路を心にまかせて、あまねく廻りありくによりて、此大地のありかたを、よく見究めて、地は圓にして、虚空に浮べるを、日月は其上下へ旋ることなど、考へ得たるに、彼漢國の舊き説どもは、皆いたく違へることの多きを以て、すべて理を以ておし

あてに定むることの、信がたきをさとるべし、然るに皇國の古傳説は、初に虚中に一物の成れりしより、つぎ〳〵其云ることども、凡て今の現のありかたに、合せ考るに、いさゝかもたがふことなし、これを以ても、古傳の、眞なることは知べき也（二九八頁）

西洋の航海技術が進歩し、海路を自由に行き来できるようになったため、この地は球であり、宇宙に浮いていて、日月はその周りを運行しているということが明らかになった（天動説）。このことから、「漢國の舊き説」は受け入れられないのであるが、この西洋の技術がもたらした知識と照らし合わせても「皇國の古傳説」は「いさゝかもたがふことなし」なのである。

これらのことから『三大考』の序文からは、「天竺國」や「漢國」の説は西洋の説によって否定され、また「皇國の古傳説」は西洋の説によってその正しさが証明されていることがわかる。

さらに、『三大考』の末尾には、地動説に配慮する中庸の様子が窺われる。

遥かなる西國の説に、此大地も、恆に旋轉ると云説もありとかや、すべて西國は、さるたぐひの測度、いと精密ければ、さるまじきにもあらず、さてたとひ大地をめぐる物としても、古の傳への旨に合ざることもなく、己が此考にも、いさゝかも妨はなきなり、（三一五頁）

『三大考』執筆当初は、先に見たように天動説のような表現を用いていた中庸であるが、地動説と思われる考えも既に耳にしていたことがわかる。そのこと以上に重要なのが、中庸は西洋の説を「精密」であるがために一目を置き、その説と齟齬しないことを主張しているということである。

次に『追考』の西洋の説に対する考え方を窺いたい。前節に引用した『追考』の冒頭部分を見ても中庸が示していたような「外國の説」に対する考えは無く、執筆当時の熊臣の考えが若干窺えるのは、後半部分の「或人問ヒテ曰ハ

ク」以下である。まず、その質問の内容から概観したい。

或人問ヒテ曰ハク、此ノ大地ト云フモノ、今ハ上下モナク、四方八面ミナ國土ニテ、日月ノ光到ラヌ処モナク、舟楫ノ及バヌ処モナク、現ニ皆明ナルヲ、根底國此ノ大地ノ下裏ニ在リト云フコト、イカニモ不審ナリ。何ゾ現ニ死人ノ行クベキ國處アラムヤト。（三〇一頁）

ここで登場する「或人」の「大地」の考え方は、『三大考』冒頭で示される航海技術の発達による西洋の説に依拠していると考えられる。そうした場合、「大地」というのは日月の光が及ばないところもなく、船で行けないところもない。であるのに、「大地の下裏」に「根底國」があるとするのは疑わしい、「死人」の逝く国などはないのだ、というのが「或人」の考え方である。しかし、この様な質問に対し熊臣は次のように回答している。

答ヘテ曰ハク、一通聞エタレドモ、四方八面皆國土ト云フコト、本ヨリ左モアルベシ。理ニオキテ日ニ對シテ此ノ國アルカラハ、月ニ對シテ根底國ナカラムヤ。マタ舟楫ノ及バザル処ナシト云フコト、甚信ジ難シ。モシ及バザル処アリテ、其ノ中ニ根國アラバイカニセム。マタ死人ノ黄泉ニ往クト云フコトハ、神代ノ古伝説ニ據リテ云ヘルノミ。スベテ此ノ考ニ云フ所ハ、謂ハユル佛・聖人・或ハ天文・地球ナド云フモノニスガリテ考ヘタルモノニアラズ、悉ミナ古伝ノ趣ニヨリテ考ヘ出デタル故ニ、彼ノ天文・地球ナドノ説ニ引キ合セテハ言ヒ難シ。（三〇一頁）

質問に対する回答としては、甚だ説得力に欠けると言わざるを得ないが、重要なのは引用後半部であろう。熊臣は『三大考』で述べられている航海技術の発達とそのことがもたらした「舟楫ノ及バザル処ナシ」ということを信じていない。そのため『追考』は「佛・聖人」の説に依拠していないだけではなく、「地球」という西洋の説にも依拠していない。熊臣は全てを「古伝ノ趣」に依って立論しているのである（実際には天地の関係を地泉に用いていること

は前節で指摘した）。また、熊臣の考える「大地」が全く「地球」説に依拠していない様子は、「日月分旋之図」の説明にも表れている。すなわち「大地ノ有形誠ニハ円カ長キカ知ルベカラズ。今ハタダ考ノ図ノ如ク円クシテ裏下ニ根國ヲソヘタルノミナリ。」（三〇〇頁）とあり、熊臣の西洋天文学に関する知識は非常に乏しいものであったと考えられる。

以上、『三大考』と『追考』における中庸と熊臣の「外國の説」に対する考え方を概観した。まず、中庸の考え方は、仏教説・儒教説に対する批判が前提にあり、その根拠として西洋の説を用いている。そして、「皇國の古傳説」はその西洋の説と並べても齟齬するところがないものだとしているように、西洋の説を一つの基準として考えていたのである。他方で熊臣は、仏・儒・西洋のどの説にも依拠すること無く、一部自説を含みながらも「古伝ノ趣」に依って『追考』を著していたのである。[23]

このように両者の「天地泉」に対する認識の違いは、すなわち西洋の説を受け入れるかどうかということに起因している。西洋の説を「精密」なものと考える中庸にとって、根国は地球上にないことは明らかなことなのであるが、西洋の説を受け入れない熊臣にとって、「地」には船では行けない「裏下」の部分があり、そこには根国があるのである。このことによって「天地泉」は三つでありながら四つであり、根国と泉国を同一視することはもとより月讀命と素戔嗚尊を同一神であるとする説は、誤りであると考えられるのである。このような熊臣の視点から『三大考』を見た場合、それが「古伝ニヨリテ思ヒ得ラレタルモノ」で、「誠ニ有リ難キ考」であっても、「少シ考ノ不足」があるのではないかという結論に至るのである。

おわりに

以上、一節において抽出した二つの問題点、すなわち「『三大考』の文言に端を発する問題」と「『三大考』の背景の問題」に関して、二節三節において熊臣の考えを概観した。[24] これらのことをまとめると、『追考』を著した当時熊臣の西洋天文学の知識は乏しく、西洋の説を受容する『三大考』とは一線を画しているといえる。そのことが「天地泉」の認識に大きな違いを生みだし、熊臣にとってのそれは三つにして四つであり、地球の裏という舟楫の及ばない場所に根国を配置することになるのである。言い換えれば、中庸にとって黄泉国（＝月・根国）は西洋の説と齟齬しないために地球外に置く必要があったのに対し、西洋の説に依拠しない熊臣にとって根国は地の裏側で充分なのであった。

岡熊臣の伝記的研究に若干言及したい。本稿で取り上げた『三大考之追考』は熊臣の霊魂観研究の前論とされているということは既に述べた。「前論」であるが故に、『追考』中で死について言及している箇所はほとんどない。

人ノ死ニテ根底國ニ行クヲ泉國ニ行クトイヘルハ、伊弉冉尊ノ行キ坐シシ時ヨリ云ヒツ伝ヘタル事ナリ。其ノ故ハ、彼ノ御時ハ泉ト根底ト未ダ離レザリシ程ナレバ泉トモイヘルナリ。後ニ泉ハ月トナリテ、日ト並ビテ此ノ土ヲ旋ル程ニナリテハ、根底國ゾ死セル人ノ罷リ行ク処ニハアル。其レヲ猶泉國ヘ行クトイハム妨ケナケレドモ、細カニイヘバ、夜見ハ今ハ月ノコト、根底國ハタダ御國ナドノ如ク此ノ大地ニツキテアルナレバ、其ノ始コソ一連ナレ、今ハ別ナリ。（二九七頁）

人が死んで根国往くことを黄泉国に往くというのは、伊弉冉尊の古伝に依っている。これは、その当時根国と黄泉国が連続していたためであり、実際に死人の行く所は「根底国」であると述べている。ここでは、元来根国と黄泉国

が連続していたことの説明に重点が置かれているとわかる。このことから、熊臣の霊魂観は、このころその一端を窺うことはできるが、未発達なものであったと考えられる。であるならば、この『三大考之追考』執筆の四年後（文化八年、一八一一）に経験することとなる神葬祭復興運動の挫折[25]と、さらにその後に目にすることになる『霊能真柱』（文化九年）の存在が、熊臣を霊魂観・幽冥論研究へと強力に向かわせる転換点となったといえるのではないか。

『三大考之追考』の九年後、平田篤胤『霊能真柱』に影響を受けた『霊の梁』を著し、さらにその六年後、熊臣四十歳にして著されたのが『千代の住処』である。これらの著作を経て、熊臣の霊魂観・安心論は形成されたとされている。であるならば、『霊の梁』と『霊能真柱』の比較は、熊臣の霊魂観研究において最も重要な作業となるであろう。また、後年の著作と考えられる『学本論』所収「蘭学」のおいては、蘭学から皇国の古伝を考える事を認めており[26]、本稿で示した熊臣の姿勢とは異なる。このような点にも注意を払いながら、岡熊臣の霊魂観・幽冥論そして安心論の研究を進めていきたい。

註

（1）宮崎幸麿編『贈従四位岡熊臣小伝』（明治四十年）、佐野正巳『国学と蘭学』（雄山閣、昭和四十八年）

（2）加藤隆久『神道津和野教学の研究』（国書刊行会、昭和六十年）

（3）阪本是丸「岡熊臣著『霊の梁』をめぐって—解説と翻刻—」（安津素彦博士古稀祝賀会編『神道思想史研究』、昭和五十八年一月）、安蘇谷正彦「岡熊臣の「死」の問題—宣長・篤胤との比較を通して—」（國學院大學日本文化研究所創立百周年記念論文集編集委員会編『維新前後に於ける国学の諸問題』、昭和五十八年三月）

（4）桂島宣弘「復古神道と民俗信仰—岡熊臣の「淫祀解除」批判—」『幕末民衆思想の研究【増補改訂版】』（文理閣、平成

十七年）初出は『日本思想史研究会会報』七号（日本思想史研究会、昭和六十三年）、原題「復古神道と民俗信仰についての覚書」、張憲生『岡熊臣　転換期を生きた郷村知識人』（三元社、平成十七年）

（5）加藤、前掲書

（6）前田勉編『新編　日本思想史研究―村岡典嗣論文選　東洋文庫７２６』（平凡社、二〇〇四年）。初出は『哲学雑誌』（第三〇巻第三四二号、一九一五年）

（7）河野省三『国学の研究』（大岡山書店、昭和七年）

（8）佐野正巳『国学と蘭学』（雄山閣、昭和四十八年）

（9）安蘇谷正彦『神道の死生観―神道思想と「死」の問題』（ぺりかん社、一九八九年）初出は國學院大學日本文化研究所創立百周年記念論文集編集委員会編『維新前後における国学の諸問題　創立百周年記念論文集』（國學院大學日本文化研究所、昭和五十八年）

（10）加藤、前掲書ならびに阪本、前掲論文等

（11）加藤、前掲書

（12）霊魂観の研究が本来「天地泉」の成り立ちから説き起こされるべきことは、熊臣自身が後に影響を受ける平田篤胤『霊能真柱』に述べられているところである。（『新修平田篤胤全集』第七巻、平田篤胤全集刊行会、昭和五十二年）

その霊の行方の。安定を知まくするには。まづ天地泉の三つの成初。またその有象を。委細に考察て。また。その天地泉を。天地泉たらしめ幸賜ふ。神の孝徳を熟知り。また我が皇大御國は。萬國の。本つ御柱たる御國にして。萬物萬事の。萬國に卓越たる元因。また掛けまくも畏き。我が天皇命は。萬國の大君に坐すことの。眞理を熟に知得て。後に魂の行方は知るべきものになむ有りける。

（13）『紀元二千六百年記念肇國文化論文集』（神宮皇學館、昭和十六年）

（14）服部周平氏所蔵（当時）、のちに「天地初発考」と比定される。

（15）『國語と國文學』二〇―五（至文堂、昭和十八年）

（16）『皇学館大学紀要』第一〇輯（皇学館大学、昭和四十七年）

（17）『國學院雑誌』第七四巻第一一号（國學院大學、昭和四十八年）

(18)『三大考』関係著作の分析を行ったものに金沢英之「『三大考』論争」（『宣長と『三大考』』笠間書院、平成十七年、初出は神野志隆光編『古事記の現在』笠間書院、平成十一年）があり、その中で金沢は「黄泉国＝月と根国（月と地との離れぎわ）とを別国とする、『三大考之追考』」としている。

(19)『岡熊臣集　上　―神道津和野教学の研究』（国書刊行会、昭和六十年）には、「この「三大考之追考」は岡家所蔵の「塵埃」第一冊から写し取ったもの」とある。

(20)　中庸『三大考』では、次のように述べている。「黄泉國の初發の事は、記にも書紀にも見えず、傳説なければ知べきに非れども、かの萠騰る物ありて、ありて、天と成れるに准へて思ふに、彼一物の中より、垂降る物も有て、黄泉とは成れるなるべし」（『本居宣長全集』第一〇巻、筑摩書房、昭和四十三年）

(21)「日月分旋之図」中の「外国」のうち「地」下半分に全体が位置しているものがないことは、『三大考』第十図と比較したときに重要であろう。

(22)　以下、『三大考』の引用は前掲『本居宣長全集』第一〇巻による。

(23)『追考』中に仏教や儒教に対する批判の文言はなく、ただ依拠していない旨が述べられているだけである。このことは儒仏の説を「妄説」とする中庸の姿勢とは異なることに注意が必要であろう。

(24)　後者の問題のうち宣長と『三大考』の関係という点も重要であるが、『追考』本文中に宣長に関する言及が全くないため、本稿では触れる事が出来なかった。

(25)　加藤、前掲書

(26)　加藤編、前掲『岡熊臣集 上』

予も蘭学の書物をはしゞ見るに、皇国の神代の正伝説に暗に符号たる如き説も見え侍るなり。此の故に、おのれ時々彼の説どもを引き出して、我が大道の正伝説を徴す事もこれあり。（四六三頁）

〔付記〕

本稿は國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」プロジェクトの一環として、平成二十年十二月七日に開催された神道宗教学会学術大会テーマセッション「幕末期の神

道と霊魂観」における筆者の発表、および同プロジェクト「『霊能真柱』研究会」における研究発表の一部を基にしたものである。